

平成29年度第1回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時 平成29年6月26日(月) 午後2時から

会 場 新潟市美術館 講堂

出席者

(委員) 会長	中山 輝也	新潟県博物館協議会会長
	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部教授
	佐藤 靖子	新潟市立中野小屋中学校校長
副会長	菅井甚右ヱ門・哲	書人
	田中 咲子	新潟大学教育学部准教授
	東村 里恵子	フリーアナウンサー
	福永 治	広島市現代美術館館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	岩城 文夫	公募委員
	渡辺 千代子	公募委員

(事務局)	塩田 純一	新潟市美術館長
	高橋 剛	同 副館長
	松沢 寿重	同 課長補佐(学芸員)
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長(学芸員)
	横山 秀樹	新津美術館長
	新井田 均	同 副館長
	大森 慎子	同 主幹(学芸員)
	長島 彩音	同 副主査(学芸員)

次 第

- 1 部長挨拶 新潟市文化スポーツ部長 中野 力
- 2 開会挨拶 新潟市美術館長 塩田 純一
- 3 出席者紹介
- 4 議事  
平成28年度 新潟市美術館及び新津美術館の事業報告について
- 5 閉会挨拶 新津美術館長 横山 秀樹

## 1 部長挨拶

(中野部長)

この4月から新潟市の文化スポーツ部長になった中野です。よろしくお願いいたします。  
市町村合併をして新潟市美術館と新津美術館の2館体制になったことが、新潟市の文化の面での特色の一つだと思う。現在、両館長のもと、それぞれの美術館の運営方針に沿って特色を生かしながら、また連携をしながら、市民に親しまれる美術館を目指して努力している。

新潟市は文化創造交流都市を目指しているが、現在、東京オリンピックに向けた文化プログラムが全国で非常に注目されており、本市も積極的に取り組んでいる。政府が進める三つのプログラムのうちの一つ「beyond2020」は、全国の地方自治体の中で唯一新潟市が認証機関になっており、新潟からそういう文化プログラムをたくさん進めていきたいと考えている。

また、2020年は、大勢の方に新潟に来てもらい、新潟からオリンピックを見に東京へ行く「新潟プラス・トーキョー運動」を、県とも協力しながら進めていきたい。

本日は、昨年度の事業について忌憚のないご意見をいただき、本日もいただいた意見をもとに、よりよい美術館の運営に努めていきたい。

## 2 開会挨拶

(塩田館長)

両館ともいろいろな制約の中で工夫しながら成果を挙げてきている。本日は、美術館の外から見て気づく点など、忌憚のないご意見をお聞かせいただきたい。

## 3 出席者紹介

事務局より、委員と事務局の出席者を紹介。

## 4 議事

(中山会長)

この協議会は、新潟市美術館と新津美術館の両館をより良い方向に導くために始めたもので、通算で11回目になる。その間、両館は市民に身近なものになってきたと実感している。両館が上手に補完しながら棲み分けをしてやっていることは素晴らしい。

今日、ちょっと嬉しいことがあった。先ほど、駐日モンゴル国大使館のフレルバータル特命全権大使から連絡があり、フレルバータル大使帰国前に新潟市長のモンゴルの最高勲章アルタンガダス、いわゆる大統領北極星勲章の受賞が決定した。新潟市にモンゴル国名誉領事館

ができてちょうど 10 年になるが、その間、市長が一生懸命に応援してくれたこと。個人的に長年にわたりモンゴル国との交流に尽くされたが、文化面で、「モンゴル書道展」や、昨年度、モンゴル民主革命のナンバーズリー、ソソルバラム氏の歌舞団が新潟と弥彦で公演した際、市長自ら中心となり協力してもらった。来月 17 日に大使館で授賞式があり、私も立場上（新潟モンゴル国名誉領事）、モンゴル大使館での市長の受賞式に立ち会いたいと思っている。新潟市にとって、大変おめでたいことである。もう一人の受賞者は、新潟工科大学の前学長で、元新潟大学学長の物理学者 長谷川彰氏である。

少々余分なことを申し上げたが、それでは、両館の事業報告について、委員の皆さまに活発な発言をお願いしたい。

事務局より資料 1、資料 2 及びパワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の平成 28 年度の事業報告について説明。

続いて、事務局より資料 3、資料 4 及びパワーポイントの画像に沿って、新津美術館の平成 28 年度の事業報告について説明。

（福永委員）

両館とも限られた予算や人数で、充実した事業をされているが、美術館の現場の人間として大変気になることが一つある。資料の中で展覧会のところに歳入歳出の収益率を出しているが、協議会の資料に収益率を載せるところは見たことがない。今回は新潟市美でも 67.2、それから新津は 80 パーセント以上の収益率で、ものすごく良い成績である。全国的に見てこのように収益を上げている美術館はないと思う。例えば、私の広島市現代美術館は財政から、展覧会の経費に対して大体 35 パーセントぐらいは収入を入れてくれと言われるが、実現できることはほとんどなく、入らない分は予算を減じてやっていくのが普通のやり方である。昨年度はこのようにすごく良い成績だったが、今年度以降もそれができるかどうかは、展覧会の内容にもよるし、また今後も放送局や新聞社が実行委員会を組んでくれるかどうかということにも左右され、将来的に保証できないのではないかと。協議会において口頭で報告するのはいいが、公開する書類に収益率を出すと後で苦しくならないか。右肩上がりに収益率が上がることはほとんどあり得ないので、無理して表に出さないほうが良いのではないかと思う。

それから、限られた学芸員の数でこれだけの普及事業をやるのは大変だと思う。両館が協力して、例えば同じ事業を両館でやるとか、あるいは学芸員の実習を両館で一つの講座として組み込むとか、そういう省エネができないか。今後、無理せず、少し

でも研究などに専念できるような環境を共に作っていったほうが良いと思う。

(中山会長)

皆さんに順にお聞きしたい。

(降旗委員)

両館とも、展覧会もそうだが、普及活動も充実期に入っていると感じた。私もいろいろ提案させていただいたが、問題意識を持って解決し、新しいかたちに展開している。特に新津美術館は、これだけの観覧者をよくこの職員数で入れていると、本当に感心している。そういう大変さもあるが、教育活動は大事なので頑張ってもらいたい。

最近の傾向として、展覧会を企画する学芸員と教育普及を担当する学芸員を、充実化のために分けることが多いが、こちらは館の中でチームワーク良くやっている。教育普及を担当する人も作品について知らなければならないし、作品を扱う人も教育普及を意識しなければならないので、そういう意味では非常にうまくいっていると思う。

それから、研究書としても非常に素晴らしい紀要を出している。展覧会をやりながらこういう研究を行うのは、非常に大変だと思う。評価したい。

新潟市美術館は、リニューアルの後、いま市民にどのように評価されているか。

新津美術館は、アニメや漫画などサブカルチャーの展覧会で大変入館者数も多い。最近、若い人の作品でかなりおもしろいのが出ていて、東京の中野のブロードウェイセンターにサブカルチャーのギャラリーがあり、若い人たちがたくさん来る。今の若い人たちのそういうエネルギーを展覧会のほうに展開できれば、より新しい切り口ができるのではと思う。

(東村委員)

会議に出るにあたり、美術館を利用する方や一般市民の方に聞いたところ、新潟市美術館のラウンジNの場所や、そこで何をやっているかがまったく発信されていない、近くまで行けば分かるが、せっかく催しをしているのに、分かりづらくてもったいないという意見があった。

それから、観覧者数歴代1位が「アンパンマンとやなせたかし展」ということだが、新潟市美術館が「アンパンマン」で歴代1位でいいのかというのが正直な感想である。新潟市美術館と新津美術館とがすみ分けをして2館あるという点で考えると、個人的には違和感があるが、しかしすごい数をたたき出したとうれしく思う。

「ほんぽーと（市中央図書館）」とのコラボ（アンパンマンとやなせたかし展）はすごく

素敵な取り組みで、いろいろな施設と壁を乗り越えて、発信の一つのツールとして使うのはよいことだ。

仕事柄、発信の仕方が少し気になる。新潟市美術館はフェイスブックを活用しているが、新津美術館のほうはSNS系を考えているのか。

それから、新津美術館の「西区の隠れた名品展」は、個人的には非常におもしろい企画展だったが、観覧者が少なくもったいないと思った。発信の仕方について「あなたの学校にあったあれが宝物で……」というようなキャッチーな発信をすると、西区の学校に通っていた方など、いろいろな角度から集客を見込める可能性もあるのではないかと感じた。

金津小学校の「ふれあいギャラリー」の画像で、上の方の「ふれあいギャラリー」の表示が用紙に印刷しただけで貼ってあるので、少し見せ方を工夫してもよいのではないか。また、他校からも飾ってほしいという意見はないのだろうか。

もう1点、新津美術館の出前美術館について、地元の秋葉区の学校名が挙がっていないのは何か理由があるのかお聞きしたい。

(菅井委員)

私の町内会では役員がぜひ美術館に行こうと言っていて、こちらに連絡が来ているはずだが、町内会でまとまって来る方法もあると思う。私もいろいろ聞かれたが、それには行ってみたくてと答えている。今やっている魯山人展のことだと思うが、解説してもらえるとということで喜んでいる。そういう集客の方法もいいんじゃないかと思う。

(金山委員)

私は今年、国内研究のため、一年間大学から時間をもらい、科研費（科学研究費）で調査をやっている。今月は北海道や秋田、富山、高岡と、ほとんど毎週出歩いている。美術館も調査の対象だが、美術館と博物館を比べると、行政の中では博物館より美術館のほうが、首長の政策に乗りやすい傾向がある。ということは、予算も含めて人、物、金は美術館につくが、その代わりいろいろと期待される。具体的にいうと、展覧会などの事業数も以前よりもう少し増やせばよいという傾向があるらしい。政策に乗るということは、その自治体が美術館を売りにしていく、そういう表れが全国での調査では傾向としてあるということを紹介しておきたい。

また、資料の購入には予算がつかないという自治体が意外にある。中には燻蒸もできないというところもあり、美術館や博物館の根本的な問題でもある。先ほどの報告では資料を購入しているとのことだが、これは購入のための基金があり、その中で運用しているというこ

とど思うが、どういう執行の仕方をしているのか。

(塩田館長)

本市に基金はあるが、基金の中身の大部分は購入した作品であり、その作品を一般会計の予算で基金から再買取りをするようにという指導がある。資料購入予算は単年度の予算でついでおり、その中から、基金からの作品再買取りと両館での資料購入に充てている。つまり基金は使えない状態にある。

(金山委員)

基金は使わないのか。

(中山会長)

すみません。一通り（各委員から意見等いただいてから）でお願いします。

(金山委員)

資料の購入の仕方と管理の状況について後で教えてほしい。

(佐藤委員)

「西区の隠れた名品展」で、学校から作品を貸出す際にいろいろ調査をしてもらい、大変ありがたかった。学校での保管状況は非常によくない。作品を保管する倉庫の管理者は教頭とかだが、どのように保管し、どのように見せたらいいのか分からない人が多いので、学校にアドバイスしてもらえると大変ありがたい。

金津小学校の展示について、秋葉区内の小、中学校に呼び掛けるとか、金津中学校のほうはどうなのか、聞きたい。

「木村希八さんの贈り物」展でもらった図録が素晴らしく、二～三百円もらってもいいくらいのものである。この間六本木でやっていた「草間彌生展」でも図録の通信販売をやっていたが、重くなると思うと買うのをためらうので、厚みの薄い物を販売してもよいと思う。

「ほんぽ一と」のサテライト展示はいい取り組みだと思う。美術にあまり興味のない人を目にしてもらうにはどうしたらいいかと思うことがある。私も旅行先でポスターなどを目にして、こんな美術館があるんだ、空いている時間に行ってみようという気になることがある。いま、新潟駅を改築しているが、JRと交渉して駅の辺りでスペースをもらい、新潟にはこんな美術館がありますよというPRの道筋があると、観光客にもっと来てもらえるのではないかと。

(田中委員)

まず、各館の企画展に関して、新潟市美術館の「徳川名宝展」は、館の所蔵作品とはジャ

ンルが違うが、身近なところでいろいろなジャンルの美術に触れる機会が、東京などと比べると少ない中、こうしたジャンルの展覧会を開催したのはとてもよかった。

「木村希八さんの贈り物」は寄贈された作品を有効活用した好事例といえ、刷り師という観点から版画文化に焦点を当てたことで、興味深かった。

新津美術館の「西区の隠れた名品展」にとっても感銘を受けた。新潟大学からも出品したが、作品の管理状況について貴重な指摘を受けた。美術品として普段認識されない作品が市内にはたくさんあるはずだ。そういうものに市民の関心を引き起こすという意味でも、とても意義深いものだと思う。

2点目、先日新潟市美術館で行われた、4館（県の2館と市の2館）共同の若手学芸員のトークセッション（「美術館のあしたのあした」）を聞いた。これはいろいろな意味で大変よい企画だった。学芸員の仕事や美術館の使命は市民になかなか正確に伝わらないと思うが、あのようなイベントを行うことによって、美術館の仕事、学芸員の仕事について発信できる。美術館の活動について市民が理解を深めるよい機会である。その前段階として行われたという、修復作業の公開も、情報発信という意味で、そして理解を深めてもらう意味で、とても意義のあるものだったと思う。

最後は、教育学部の美術科では教員養成に一層力を入れていくことになるので、学生とともに、美術館と教育普及か何かのかたちで連携させてもらえるとよいと思った。

（渡辺委員）

一般市民の目線も大事という観点から述べさせていただく。やはり美術は文化的、アートの面は素晴らしいと頭では理解できていても、実行となると、経済的な面とか、観覧料とかの問題が結構ある。

招待券を2枚もらったことを友達や身内に話すと、これ行きたい、あれ行きたいと言われ、新潟市美術館の「徳川名宝展」を見たが、最終日だったので駆け込みが結構大勢いて、やはり駐車場が足りないと思った。正面はだめで、第2駐車場に無事に入れたが、駐車場が美術館の敷地内だけではないというのが分かりづらい。駐車場の位置をPRして、たとえば第2駐車場の位置をしっかりとパンフレットにも入れれば分かりやすいと思う。

新津美術館の「ヘレンド展」はチラシを見ても、ヘレンドがどこの国のものか分からなかった。ハンガリーというのが小さく書いてあったのだろうが、展示を見ていろいろと分かって勉強になった。

美術館には、見たくもない人を誘ってもだめである。興味をもたせる、宣伝の仕方もあるのではないかと思う。

新潟市美術館と新津美術館も漫画のほうが収益率がいいようだ。学芸員の熱心な取り組みも分かるが、目玉を打ち出して、そこに集中するやり方もいいのではないかと思う。

(岩城委員)

「徳川名宝展」よりも「アンパンマン」のほうがかなり観覧者数が多かったのは、少しショックだった。

「ヘレンド展」は非常に興味深い展覧会で、美しい磁器に人名が入っていたり、人の顔が焼かれていて、(王侯貴族の)個人的な注文でああいうものを作るのかと、新たな発見だった。

「徳川名宝展」は、私は歴史が好きなので、征夷大將軍の任命書や、徳川家康の署名が源家康や藤原家康になっていたり、名品だけではなくそういうものの展示が私は非常に興味深く、ありがたかった。

先日の学芸員のトークセッションは、新潟日報にも取り上げられていたが、非常にいい企画だった。なんとか大臣がいろいろ言ってから、だいたい学芸員が目されるようになったが、こういうかたちで発信するのはとてもいいと思う。

また、東京辺りの美術館では美術館本体よりも喫茶店とかに人が集まるという話も聞くので、喫茶室とのコラボをこれからもやっていけば、ここはロケーションもいいので、非常によくなると思う。

全体的に、学芸員の努力に敬意を表する。忙しい中に研究論文を書くのも高く評価する。

(菅井副会長)

先ほどの発言を補足させてほしい。

広報の仕方について、毎週出ている中央区とか秋葉区とかの区だよりも、美術館でこういうことをやっているというのを全部は載せられなくても、活字だけでも一行入れられないか、検討してください。

(中山会長)

私からも一言申し上げたい。やはり今、美術館も博物館も観光目的になってきている。たとえば福井県では“観光営業部”の所管である。美術館が文化行政から観光へ移ったことで、集客、観覧者数の増加を狙っていると思うが、果たしてそれでいいのかどうか。観覧者数が多ければいいかということ、私は決してそんなことはないと思う。ただ、年間のうち幾つかそれがあってもいいが、やはりベースは、美術とか芸術をどうやって学んだり楽しんだりする



かということではないかと思う。抽象画の展覧会の観覧者数が少なくなるのはやむを得ない。かといって、数だけで比較していくのはどうかと思う。あまり観覧者数ばかりを表に出さないほうがよい。たとえば、集客だけを考えると、全国巡回しているものばかりになると、その館の主体性がなくなってくるのではないか。貸し館業になってしまう恐れもある。やはりそういうところも少し考えておいた方がよい。

あとは美術館のほうからこれらについて回答をお願いしたい。

(塩田館長)

新潟市美術館について、たくさんの質問があったので、全体的なことに対してお答えする。私は美術館というのは、ある理念を掲げつつ、しかし現実を横目で見ながら、どう折り合いをつけていくかというのが美術館活動だとずっと考えている。信濃デッサン館館長の窪島誠一郎さんは、私が若い頃、作品を借りにいった時に、「美術の仕事というのは波打ち際を歩いていくようなものだ」と言われた。要するに海のほうから寄せてくる波にさらわれないように何とかバランスを取りながら、その波打ち際を歩いていく。それがまさに、理念を掲げながら、しかし理念だけを追求していくわけにはいかない、現実の経済社会の中に足を置きつつ、どう折り合いをつけていくのかということだと思う。

昨年度はいろいろなタイプの、たとえば「徳川名宝展」があり、一方で「アンパンマン展」があり、オーソドックスな「舟越桂展」があり、それから収集、収蔵の仕事と結びついた「木村希八展」があった。美術館に課せられたさまざまな課題があり、それとどう折り合いをつけていくかということで、財布も苦しい中でいろいろやりくりして、出した回答である。新津美術館とは美術館としての方向が、少し異なる方向で動いているのは、それぞれの個性ということであると思う。今後も私どもとしては、やはりオーソドックスな展覧会を中心に据えていくのが基本だと思う。必ずしも収益率はよくないが、新潟でしか発信できないことを発信していく。それは新潟の郷土の作家の研究であったり、新潟出身の現代美術の作家の展覧会であったり、さまざまなかたちを取るとは思うが、それはやはり、そういう現実と理想のはざまでもう折り合いをつけていくかという一つの解だろうと思う。

教育普及も、人員・予算が限られている中で、いろいろ工夫しながら、当面できる最善のことをやっているつもりである。ただ、それがベストではなく、もっとやりたいことはたくさんあるが、当面こんなかたちでやっている。

(横山館長)

新津美術館について、ご質問にお答えさせていただく。収益率についてのご意見について

は、今の人たちが美術館離れになっているという一番の問題があり、どうやって美術館に来てもらい、また次の世代につなげていくか、その方法論も問わなければならないと思っている。どのように、今離れていっている人たちを美術館につなぎ止め、ましてや次世代につなげていくかというのが、与えられた役目の一つだと考えており、新津美術館では、各世代に対応するような展覧会を組んでいる。地元作家の展覧会も美術館としての一つの使命だと思っており、収益率を資料に出したのは、いかにして多くの人たちに来館してもらい、満足してもらえるかを考えたときには、やはり単独の力ではもうどうにもならない時代に来て、新聞社やテレビ局と実行委員会を組むことも必要になっており、その際、実行委員会の相手方が求めてくるものは収益率であり、それに対してどう応えていくか。それがうまくいけば、人が入らなくてもやらなければならない展覧会も組み込んでいけるのではないかと考えていることからである。

それから、昨年度の新津美術館の状況についてお話ししたい。学芸員3名のうちの1人が休職中で、現在も2名の学芸員で館を運営しており、学芸員の講座や教育普及の事業も回数を少なくしている。急に学芸員の補充はできないため、先ほどの、新潟市美術館というんな協力をしてやるとよいというご意見のように、人的な交流も考えられ、新潟市美術館の学芸員から新津美術館に来てもらえていればまた事情は少し変わってくると思うが、現実的には難しいと思われる。

また、展覧会については、若い人も当然だが、高齢者も大変大事だと思っている。年齢構成にも考慮し、展覧会によっては親子三代が一緒に見られるようなかたちで、多くの人に来ていただくように考えて組んでいる。

さらに、SNSについては、自治体によってSNSを利用するときに基準が設けられており、学芸員が自分の考えだけで出すというわけにはいかないのが、上席の者が目を通すとかということをやったうえで、良い広報手段と思っているので、これから機会があればSNSもやりたいと考えている。

金津小学校の児童の作品展示については、金津小学校では、全ての児童が6年間の間に1回は（新津美術館の中の展示スペースの「ふれあいギャラリー」に）作品が飾られるようにという長期計画を立てているものであり、私どもは地元を大事にしていきたいと思っている。展示スペースの掲示物も学校が作ってきたもので、学校の気持ちも大事にしてあげたいのでそのままにしているものである。

次に、市の広報について。市報には両館とも各展覧会ごとに1回は出しており、区だよりは、新津美術館は秋葉区だよりに、新潟市美術館も中央区だよりに出してもらっているが、（誌面のスペースに限りがあり）他の区に依頼してもなかなか出してもらえない現状である。

(金山委員)

新潟市美術館と新津美術館それぞれの、資料の購入状況と保管管理状況はどうなっているか。具体的に言うと、購入の予算はいくらで、いくら執行したのか。それは公開できるのでしよう。

(中山会長)

それについては別の委員会（「美術資料選定委員会」）がある。ですから、そこへ立ち入るのはどうかなど。

(金山委員)

それは役所の判断でお任せする。しかし、これは執行されているものでしょう。

(塩田館長)

単年度予算で2,000万円ついている。基金には3億円の現金があったが、その3億円はあらかじめ使われ、現在は購入した作品としてその3億円分がある。それを一般会計予算で基金から買取るよう指導があり、2,000万の予算の中のある程度の金額で作品を買取って、現金を基金に戻し、残った金額で資料購入に充てている。大雑把に言うと、2,000万を3対1ぐらいで新潟市美術館と新津美術館とで分けて、それぞれで資料を購入する。ただし、私どもに割り振った分の中から基金の作品の再買取りをしている。

(金山委員)

予算はついて、資料購入を行っているということですよ。

(塩田館長)

そうです。

(金山委員)

燻蒸は毎年しているか。

(横山館長)

新津美術館ではやっている。

(金山委員)

収蔵庫の燻蒸を。

(横山館長)

作品等は燻蒸して収蔵庫に入れており、また、虫害等の検査も定期的に行っている。

(金山委員)

I P Mで、特に問題はないか。

(塩田館長)

定期的にやってもらっている。それで今は特に問題はない。

(金山委員)

年に何回ぐらいか。6回ぐらいか。

(横山館長)

2回(菌)と1回(虫)で、空気も環境もやっている。

(金山委員)

それがすごく気になる、美術館の場合は。

(横山館長)

文化財虫害研究所に依頼しやっており、以前委員会で指摘されたので、両館ともIPMは計画的にやっている。

(金山委員)

でも、なかなかIPMだけだと不安でしょう。

(横山館長)

その時に(実施機関から)指摘された場合にはきちんと対応している。

(金山委員)

では、燻蒸はやっているということですね。

それから、先ほどの福永委員の質問について私も気になっていて、収益率を出すというのはそれはそれで一理あると思うが、ただ、その根拠というのは、実はさまざまな要因がそこにある。具体的に言うと「アンパンマン」も「藤子」もプロダクションに対して賃借料を払うだろうが、この数字をどう見るかというときに、賃借料とか何にも入っていないこの数字でいいのか。

(横山館長)

入っている。

(金山委員)

どういう計算の仕方をした収益率なのか。

(横山館長)

パーセンテージは資料1の1ページ目と資料3の1ページ目にある。

(金山委員)

たとえば「アンパンマン」だったら、収益率が166.7パーセントと出ている。

(横山館長)

320万の予算のところ、533万の収益があったということで、ギャランティもみんな含まれている。

(金山委員)

そうすると、66.7パーセントは収益ということか。

(中野部長)

ただし、これは市の予算である。市から出ているお金が320万円に対して、市に入ってきたお金が533万3,000円で、新潟市としては166.7パーセントの収益率だったということで、実行委員会全体の費用ではなく、新潟市が負担した分の額に対しての数字である。

(福永委員)

実行委員会の場合は、たとえば3者でやると予算が3倍になり、収入も3分の1で、美術館に入ったお金がこれだということですね。ただ、実行委員会を組めれば、放送局も新聞社も収入を得るために宣伝はいっぱい打つでしょう。だが自主事業だとそういうことができない。先ほどの広報の問題にもなってくるが、収益率の数字にはそういう要素が入ってくるので、単純比較は難しい。さらに言えば学芸員の労力とか新聞社の社員が動いたお金もここに入っていないわけだから。

(横山館長)

それはお互いですね。

(福永委員)

だから、全部フラットにして同じように単純比較されることを懸念する。

(横山館長)

収益率については、当然20パーセントとか30パーセントの収益率の展覧会というものもあるが、市役所では特定財源と一般財源で事業が行われており、その一般財源の予算だけでは必要な支出をし、収入を得ることはできないものがあり、その場合、市がどこまでそれを可とするかということも生じてくるのではないかと思う。

(金山委員)

それは役所の中の話だ。福永委員も私もちょっと違和感があったのは、収益率を各展覧会ごとに並べると、どうしても比較してしまう。しかし、それぞれ事情が違う。人のかけ方、電気・ガス、光熱費、ギャランティの問題とか、それからマスコミの力の入れ方も、全部いろんな要因がそれぞれ違う。それを収益率という数字で、結果で比較してしまうと、これはあまりよくなかった展覧会、これはよかった展覧会だという誤解を受けた評価をされがちであるから、こういう出し方はあまりよろしくないと思う。

(横山館長)

わかりました。

(金山委員)

だから、補足説明をするのはいいが、こういうかたちで出さないほうがいいのではないか。いろんな要因が違うのだから、誤解を受ける。

(高橋副館長)

資料の作成は事務局で担当したが、収益率については、協議会の委員向けの資料ということで出したが、一般向けの資料には出していない。ご理解いただきたい。

(中山会長)

企業でやっていけば、これはこのままだとそれは通用しない。それはよく分かっているが、今、やむを得ないのではないですか。

(福永委員)

横山館長の言うように、限られた予算の中で実行委員会をやるのは、うまい解決方法の一つだと思う。やむにやまれずやっていることももちろんあるし、そういう意味ではよくやられており、実行委員会も必要だと思う。ただ、単純に収益率だけが一人歩きすると、あとでつらいことになるのではないかということである。

(横山館長)

次回からは収益率を外してご説明することを、両館で検討させていただきたい。

(中山会長)

収益率の皆さんへの出し方は、まだやり方がある。それは美術館の問題だと思うので、ここ限りということでもいいのではないかと思う。

(金山委員)

その辺は検討させていただきたい。

(渡辺委員)

本当に素朴な提案だが、私が招待券を渡す時、新潟市美術館と新潟市新津美術館のネーミングが似通っていて、どっちがどっちか分からないとよく質問された。もっと分かりやすくするために、たとえば新潟市中央図書館のことを「ほんぼーと」という愛称で呼んで、今そちらのほうが一般的になってるようだ。愛称を一般から募集して、親しみが持てて分かりやすいものにしたら、区別もついてくるのではないかと思う。今後の発展のためにもそういう愛称を皆さんからつけてもらうことも、美術館の必要性を共有していただくということで、良いことだと思うがいかがか。

(中山会長)

愛称をとという提案だが、この二つの美術館はきちんと名前が決まっているので、それを分る分からないというのは一部の市民の方ではないかと思う。

(横山館長)

これが正式名称なので、こういう公の場では新潟市新津美術館と言っているが、普段は新津美術館と言っている。

(中山会長)

だいぶ時間が過ぎ、意見もある程度出つくしたので、事務局にお返りする。

## 5 閉会挨拶

(横山館長)

長時間にわたり、ご審議いただきありがとうございました。本日の審議の内容を踏まえ、両館とも29年度の美術館運営に取り組んでいきたい。より市民に親しまれる美術館となるよう、私どもも努力を続けていきたいと思っている。本日はお忙しい中、誠にありがとうございました。